

出版稲門会

◎コロナ禍と出版界 菊池社一 (1頁)
◎寄稿: 渡辺浩章/河村達哉/福田峻佑/北村優太/筑紫恒男 (2・3頁)
◎とまりぎ: 宇都宮元樹 (4頁)
●発行 出版稲門会 東京都台東区台東2-24-10 (株) 新星出版社 内
電話 03-3831-0743 〒110-0016
●発行人: 筑紫恒男 ●編集人: 北口克彦
●015号 2020年10月1日発行 題字: 服部敏幸

コロナ禍の半年で、いつのまにかオンラインの打合せや会議が当たり前になってしまいました。これが常態になっていくのでしょうか。そして、日本のGDPは3割に近い減少など、戦後最大の経済危機が言われています。出版に携わる同学の皆さんの様子はいかがでしょうか？

この危機の中、どれほど売上が減るのか、私も心配し、身構えてもいましたが、現在までのところ心配したほど大きな影響はなく、本の持つ力に改めて気づかされています。緊急事態宣言が発令された中では、多くの書店(ことに都市中心部の大型書店)が休業しました。でも、郊外の店舗には、お客さんが普段より多く訪れたようです。事実、私の家の近くのお店も、レジを増員して対応していました。「巣ごもり」に備え、子どもの学習書や歴史書などを中心に、本が求められたということですね。

5月の連休が終わる前後、大きなお店が再開すると、待っていたお客さんたちはレジに列を作りました。書店さんの中には「われわれの仕事はこれほど人々に求められていたんだ、不要不急のものではなかった

んだ」と感激した方もおられたと聞きますが、私も同じでした。アマゾンなどのネット書店は、大きく売上を伸ばしました(アマゾンは、はじめ生活必需品を優先したそうですが、それでも本の売上も伸びました)。

今回特徴的なのは、電子書籍の急伸です。すでに電子書籍は、出版の売上全体の2割を占めるまでに

なっていますが、コロナ禍を契機にさらに拡大する勢いです。感染は接触で起きますから、接触のないネット書店や電子書籍の伸長は、当然といえば当然の話です。図書館の電子書籍へのアクセスも、昨年比で4倍にもなったと言われます。公共図書館のうち、デジタルに対応できているのは15%ほどだそうです。今後この比率は急速に上がる

出版界

コロナ禍と出版界

岡本厚

歴史上、パンデミック(おびただし死)が、それまでの価値観を覆し、新しい生き方、新しい社会や国家のあり方をもたらしたように、現在私たちに、生き残りを賭けた大きな価値観の転換が要請されているように思います。そして、その向かうべき方向を、論理と倫理と情感をもって示すことが出来るのは、本以外にないと私は信じているのです。

(岩波書店社長・昭52文)

早稲田界限

昨年秋口から中国武漢で正体不明のウイルス性肺炎の発症があいつく。瞬く間にこの新型コロナウイルスは世界を席巻する。パンデミックだ。1月15日、武漢帰りの日本人からも感染が確認された。

2月3日、横浜に寄港した大型クルーズ船で乗客の集団感染が発生、死者もぞくぞくと。ただならぬ雲行きに。非常時指揮官たちの腰はひけ、無能の対応は目も当てられぬ後手後手のドタバタぶり。

三密忌避・手洗い・マスク奨励。百年前のスペイン風邪流行時と変わらぬ改善策だ。学童期だった1957年、香港由来の流感に罹り高熱激咳の塗炭の苦痛を味わった我が身は之に殊勝に願うばかり。

3月26日、羽鳥慎一(平8政)がMCを務める「モーニングショー」で前夜の馬場駅前、大音声が騒ぐ酔漢たちを映し出す。三密自粛要請さなかの惨状だ。ちよいと待て。おいおい、こらあー。

酔漢たちは「集まり散じて」とか大声で唄っていたのであります。鬱憤を貯め込む学生らの一夜の反乱だったのか。翌27日、大学は「早稲田大学の学生諸君へ」と自覚を促す一文を総長名で発した。

けしからんと謂うは易し。学内外を問わず無頼に振舞うことの多かった老OBに叱る資格はなしかと諦観する乎。とはいえ無症状でも感染させる大敵のコロナだ。稲門校友よ。どうぞ、互いに用心を。

コロナ禍で暴かれたこと。わが国の貧しい公衆衛生・医療体制。今や後進国のデジタルインフラ。格差社会の露見も同根だ。かくして災禍未収束で首相は辞任。

(岡部尚幸・元ほろ出版/六耀社社長・昭43迄)

心のふるさと われらが母校



宇都宮元樹

早稲田を卒業して30年以上が経過しました。先日は久しぶりにゼミの同窓会があり、同級生や先輩とも再会し、懐かしい時を過ごしました。大学時代我が家は溜り場で、酒と麻雀と時々勉強の日々、特に麻雀人脈のお陰で卒業も出来、就職も決めました。

大学を卒業して就職したのは生保会社です。その魅力が教えてくれたのが稲門の麻雀先輩で、甘い言葉に誘われて入社しました。当時はパブル真っ只中で生保マネーが世界を席巻していた時代、その運用を担当出来ると思込んでいました。しかし現実はその間に甘くはなく、企業年金の事務を担当し、日付が変わるまで残業の日々を過ごしました。その後、北海道に転勤、生保レディーの教育担当となり販売の最先端を経験。主婦を口説いて試験を受けさせ、多くの生保レディーを誕生させたり、研修では見ず知らずの地区を担当し、徹底的な口

とまりぎ

稲門トピックス

◆とどまることを知らない天才棋士藤井聡太二冠の大活躍で将棋人気が沸騰している。おかげで、彼に数々の最年少記録を破られたかつての天才少年加藤一二三九段は現役引退後もひっきりなしにテレビ出演、大変な人気者に。

◆加藤九段、中退だがれっきとした稲門OBである。母校によく足を運ぶ姿が見られた有名人のひとり。藤井二冠

事務局だより

総会開催の中止について

昨年11月6日、リーグロイヤルホテルにおいて「出版稲門会35周年・出版三田会40周年」の合同懇親会を稲門会112名、三田会79名総勢191名の参加のもと盛大に開催いたしました。開催2週間前までは150名程度の予定でしたが、直前まで多くの校友にお声掛けをいただき、結果的に予定した会場が手狭になりご参加の皆様にご迷惑をおかけすることとなりました。不謹慎ながら合同懇親会のタイミングが昨年よりよかつた、とも思わざるを得ません。

本稿を執筆中の7月も新型コロナウイルスの猛威は収まりません。早稲田大学は他校に先駆け学生・教職員の健康を守るため様々な決定をされています。

2月27日付に卒業式・入学式の中止、3月6日付で授業開始を4月20日以降にする決定、授業開始はさらに延期され4月2日には5月11日から前期授業をすべてオンラインで行う旨を決定しました。

に記録を破られるまで、神武以来の天才と称され名人2期などタイトル獲得8期、歴代勝利数3位の棋界の大レジェンドだ。

◆プロ棋士を最も輩出する大学がなんと我が早稲田。名人2期に棋王タイトル獲得の丸山忠久九段(平5・社)、在学中に王位獲得の(竜王も)広瀬章人八段(平23政)、王座獲得の中村大地(平23政)など多士済々である。

◆囲書界にもすこい稲門OBが現われ5月30日には体育系部合同のオンライン入部式も行われました。

同時に学生・OB向けに、困窮する学生への緊急支援として臨時の寄付を要請、2か月で3億円が集まり、4500人以上の学生に10万円の給付金がなされました。特に若い世代からの寄付が多かったことが今回の特徴とのこと。さらに8月4日には寄付額が5億円に達し、そのほとんどが奨学金として給付されました。

校友会活動にも一定の制限の要請がなされており、秋に予定されていた稲門祭およびホームカミングデーは中止となりました。年内の校友会各支部・稲門会活動に關しましても中止の要請が出ております。このような時こそ稲門会有志の絆を深めるべく、出版稲門会総会を開催したいところですが、状況を鑑み、本年は開催を見送ることいたしました。一日も早くコロナが収束し、お会いできる機会が得られますようお祈り申し上げます。

(幹事長・富永靖弘(新星出版社社長)

た。コロナ禍のただなか8月14日。若聖戦五番勝負の第3局で今春卒業したばかりの(力達八段(令2・社)が開幕から三連勝、一気に勝利を納め棋聖タイトルを奪取したのである。

◆新棋聖はプロ入り後に早稲田に入学し卒業するや否やのタイトル獲得。一方で新聞社に入社する。記者活動との2足の草鞋を続ける異色ぶり。河北新報社の御曹司というが囲書界における一層の活躍を期待したい。(平)

今年ほど新しい「ことば」が生まれ、また、ことばの新しい使い方が生まれた年はないだろう。「3密」を筆頭に、経済用語も含めその範囲は多岐にわたる。ことばは時代を反映している。だとすれば、2020年、令和2年はまさに新しい時代の幕開けだと言える。

(北口克彦・三省堂社長・昭56政)

先生方は臨場感の演出に腐心され、学生は参加意識が問われる。オンライン講義と聞いて、代返はどうなる?なんて思った私は論外だとしても、現役の学生諸君には環境変化にめげることなく、今しかない大学生活を謳歌してもらいたい、と切に願う。早稲田祭もオンライン開催とのこと。陰ながら成功を祈る。

(杉本淳一・日本実業出版社社長・昭57文)

編集雑記



渡辺 浩章

100年前と今

大学の4年間はラグビー部に在籍していました。生活の拠点は、当時グラウンドと寮のあった東伏見。平日は、西武新宿線で東伏見駅から高田馬場駅へ、駅から歩いてキャンパスへ、そして西早稲田のバイト先「カントリーハウス」に立ち寄り、東伏見に戻ってラグビーの練習、という往復運動の連続。

東伏見の駅前には小さな本屋さんがあって、よく文庫本を買いました。今はありません。茨木のり子さんの詩集は芳林堂書店で買いました。茨木さんは、ラグビーのスタラムを描写した詩を残しています。題名は「ギリリと光るダイヤのような日」。茨木さんは東伏見に住んでいたのです。

早稲田大学ラグビー部の創部は1918年で、その年にさつそく三高(旧制)と公式試合を行っています。翌19年には慶応OBとも対戦。22年には初のラグビー早慶戦が三田で開催されました。

ところで、100年前といえば、人類はインフルエンザの猛威とたたかっていたはずですが。いわゆるスペインかぜです。1918年から20年にかけて何度も流行を繰り返し、死者数は全世界で約4千万人、日本では約39万人にのぼったといわれています。1923年には関東大震災もありました。それでもラグビーの交流は途絶えることなく、むしろ年々盛んになっていきます。不思議です。

今はどうでしょう。新型コロナウイルスの流行で、スポーツは行わないのも見るの目も減り、格別「密」なスタラムが象徴されるように「密集戦」が醍醐味であるラグビーは、なおさら慎重です。残念です。

鉄筆を立ち上げてから7年が経ちました。編集も営業も私が一人で行うので、もともと「密」ではありません。リモートワーク中心でしたから、コロナ下でも日常にほとんど影響がありません。

とはいえ、この7年を振り返れば、経年による変化はもちろんあります。音羽の街を拠点とし、ラグビーを観戦しながら過ごすうちに、ラグビー本ばかり出版するようになっていきました。付き合い先は講談社グループに、それも早稲田大学OBに偏っていました。これを原点復帰というのでしょうか。

か？ わかりません。(執筆代表取締役・昭33社)

変わらないのは...



河村 達哉

気が付くと五十を過ぎておりまして、思えば東京六大学野球を見るために神宮球場に通い始めて、三十年以上になります。世が「平成」に変わった年のこと、新人生だった私がサークルにもなじみ始めた頃、やって来たのは春の早慶戦。当然、一年生はまずはチケット取りからです。当時は文キャン事務所で発売されるチケットを、キャンパスに(正確には文キャンの外の歩道に)泊まり込んで入手し、試合当日も朝早くから神宮球場に並びます。エースは、その年口ツテに指名された小宮山投手だったっけなあ。今や、早大野球部の監督です。いやあ、遠い昔になってしまいました。

神宮球場には欠かさず通うようになり、リーグ戦の優勝や全日本選手権優勝、はたまた東大と並んでのリーグ戦最下位やら、さまざまなシーンを球場で見ました。む

古関裕而と「紺碧の空」



筑紫 恒男

本年4月から始まったNHKの連続朝ドラ「エール」は、古関裕而をモデルとしたもので、その第8週は「紺碧の空」が生まれる過程を描いたものでした。

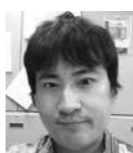
「紺碧の空」は昭和6年(1931年)に作られた。当時「若き血」の慶應義塾に押しされ、早慶戦は連敗の状態だった。そこで応援部では新しい応援歌を作ろうと、歌詞を学内で募集した。選ばれた歌詞は、当時高等師範部学生だった住治男の作による。若い作曲家に頼もうというので、当時22歳の古関に依頼された。

作曲の段階では、(覇者、覇者、早稲田)の箇所に苦勞し、時間がかかったが、発表会の3日前に完成。この応援歌のおかげで早慶戦に勝つことができた。「紺碧の空」は第六応援歌として生まれたが、その後第一応援歌となって歌い継がれている。自分たちが入学して、初めての神宮球場で歌唱指導を受け、感激したことを覚えている。

古関裕而にとっても「紺碧の空」

ろん、早慶戦だけ、なんてことなく、毎年飽きもせず春と秋のリーグ戦開幕から通うわけでした。特に印象深いのは、93年春の早慶戦、仁志選手のサヨナラ満塁弾。03年の10勝全勝優勝での四連覇。04年春の立教戦でのノーヒットノーラン負け(やられた方)。10年秋の齋藤祐樹主将の時の早慶優勝決定戦。あたりでしょうかねえ。

ら編集に異動してからの四年間で、様々な場所に行く機会を頂けた。その中でも最も貴重な経験は、2019年10月に、赤川次郎先生や他版元の担当編集者たちと、二週間ほどヨーロッパ数カ国を見てまわったことだ。この旅行は数年に一度、編集者に外の世界を見てもらいたいという趣旨で行われている。主な旅先として、ポーランドのアウシュビッツ、ベルケナウ強制収容所や、ヨーロッパで一番標高の高い駅があるスイスの登山鉄道、オーストリア・ウィーンのオペラ座での観劇など、普段なかなか行くことのできない場所ばかりで、大変勉強させてもらった。かつて私は貧乏学生で海外旅行はおろか、国内旅行すら行けなかった。周りの人たちにはもっと旅に出て世界を見た方が良いと言われてきたが、その意味を今になってしみじみと感じている。一方で、大学時代は教育学部の研究で「人は生涯にわたって成長する」というテーマを持っていた。学生の時に経験できなかったことが、こうして今になってその機会を頂けていることは本当に幸運なことだと感謝している。



福田 峻佑

本によって広がる世界

文芸編集者の重要な仕事の中に著者との取材旅行がある。営業か

2020年現在、コロナ禍で様々な場所に行くことや、人に会うことが難しくなり、世界を見る機会が失われてしまっている。し

は出世作となり、その後多くの作曲をしている。野球の応援歌としては「阪神タイガースの歌(六甲おろし)」「巨人軍の歌(闖魂こめて)」などがあるが、有名なものとしては、全国高等学校野球選手権大会の歌「栄冠は君に輝く」、東京五輪行進曲「オリンピック・マーチ」、

原列車は行く、「長崎の鐘」、「ヨマンテの夜」などがあげられる。軍歌、校歌などの作曲も多く、生涯で五千曲作曲したとされている。なお、昭和51年(1976年)に「紺碧の空」作曲45年を記念して、歌碑が大隈会館前庭に建立された。(建帛社長・昭44数)

紺碧の空

作詞 住 治男
作曲 古関裕而

一 紺碧の空 仰ぐ日輪

光輝あまねき 伝統のもと

すぐりし精鋭 闘志は燃えて

理想の王座を占むる者 われ等

早稲田 早稲田

覇者 覇者 早稲田

二 青春の時 望む栄光

威力敵無き 精華の誇

見よこの陣頭 歓喜あふれて

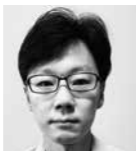
理想の王座を占むる者 われ等

早稲田 早稲田

覇者 覇者 早稲田



大隈会館前庭に建立された「紺碧の空」歌碑



北村 優太

百科辞典

かし、よく考えてみると、私が普段編集している小説の中では、様々な世界や人物、考えに触れることができる。自由に外出することとは叶わなくても、本を読むことで、感動や驚き、新たな気付きを得て、学ぶことができる。「本によって広がる世界」の重要性を再認識した今、より多くの読者に届く本の編集が求められていると信じている。

(光文社文芸第二編集部・平25数)

文学研究科での院生生活も最終盤に入り、身の振り方をいかに考えなくてはならなくなっていたところへ、縁があつて三省堂への入社が決まったのが5年前の春。大学から籍を抜き、翌年の入社まで地元へ戻って気ままな実家暮らしを決めた。こんでいた頃の話です。

近くに住む祖父父母から呼び出されて行ってみると、仏間に見慣れない古ぼけた本が(それも何冊も)どかんと鎮座しています。なんだと思つてきてみるとこれが「日本百科大辞典」、三省堂が刊行した日

本初の西洋式百科事典でした。豪華執筆陣を無数に投入して巨大企画に膨れあがったこの本は、当時の三省堂を倒産に追い込んだというわくがあります。なんでもお隣の息子さん(遠方)が空家に落ちた実家をたためたため片付けをしていて見つけたのだそうで、たまたま隣家の孫が三省堂に奉職すると聞いて、もらつてもらえないだろうかと持ちこんできたらしい。偶然であるものです。

あいにく索引のある十巻目が欠けたセットでしたがありがたくお引受けしました。版元になれば活用の機会もあるだろうという実利的なことよりも、このセットの半端なところが、学業を半端に切り上げてきた身には妙に似つかわしいものと思われたからかもしれません。

たまた中にめくってみますが、印刷技術の粋を凝らした紙面は今見ても迫力があります。読むたびになんとなく誇らしくなるのは、この壮図に挑んだ自社のためなのか、それともこれを当時購入した人が地元でいたことのためなのか。

じつはこの百科辞典、監修者にあたる「総裁」は大隈重信が務めています。早稲田の杜をようやく抜け出したところで大隈伯に再会するという、これもまた奇縁なのでした。

(三省堂・平27文庫)